

チリの鮭の養殖（その一）

稲宮 健一

世界初の鮭の養殖は一八世紀江戸時代に越後村上藩の青砥武平治の提案によって三〇年かけて三面川で自然孵化養殖の仕組が完成した。

一方、現在の世界の鮭の漁獲量はノルウェイ、チリの順で、日本は八番目である。そのチリの養殖の事始めに日本人が大きく寄与した。一九七〇年代以前に南米に鮭はいなかった。一九六九年、チリ農牧省の技術者パブロ・アギレラが中標津の水産庁サケマス孵化場に派遣され、水産庁技術者長澤有晃と出会い、JICA協力事業の支援が始まった。その後パブロが長澤をチリのコジヤイケで出迎えた。コジヤイケはサンチャゴの南一七〇〇kmの所にあり、かつて氷河で削られたフィヨルドの谷のようなところで、冬には零下二〇になる。長澤と一緒に白石芳一博士が同行し、ここに孵化場を設置した。

この孵化場に北海道からサクラマスの卵一五万粒が特殊な容器に入れて空輸された。しかし、この卵が到着する直前に白石博士は急逝した。博士の功績を記念して、この孵化場を「白石博士孵化場」と命名された。一九七四年に放流が行なわれ、通常は四年後に川へ遡上があるはずだが帰って来なかった。この困難を克服するため、海面に網を張り、生簀を作り、海面養殖に切り替えた。そして、一九七九年見事に三、四kgに成長した鮭から沢山の立派な種苗が自家育成され、空輸された北海道産より大量だった。同時に放流による回帰の試みも行われた。結果として、放流する幼魚が小さいと捕食されてしまうので、少し大きく育ててから放流すると、回帰率が上がることが分かってきた。しかし、餌代がかさむのと回帰率との割合が課題だ。

これらの経験を踏まて、一九七八年に日魯漁業がニチロ・チレ社を設立し、同社は漁船による沿岸調査を行い、プエルトモント郊外に養殖地を設定し養殖事業を開始した。チリ初の海面養殖が行われた。この事業は小規模ながら、チリで海面養殖が商業的に成り立つことを実証した画期的な事柄であった。

参照：細野昭雄著「南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち」、二〇一〇年、

ダイヤモンド社発行